
磁竜の滅竜魔導士

JUMP UP !

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

磁竜の滅竜魔導士

【Z-コード】

Z2883BA

【作者名】

JUMP UP!

【あらすじ】

ワンピースのコースタス・キッドが海賊ではなくもしフェアリー
ティルの滅竜魔導師だつたらというはなしです

プロローグ（前書き）

「いつもかっこいいコニーです、前々から書いてみたいと思っていた作品ですか？」を楽しんでいつてください。
それでね、

プロローグ

「ここはマグノリア駅の車内の中

「ちょっと、ナツ大丈夫？」

「うつっ・・・むり・・・うつ・・・もう・・・ダメ・・・」

乗り物酔いで気持ち悪くなっている桜色の髪の少年ナツ

「もお、だから付いてこなくていいって言つたのに、なんについて来んの？」

呆れたように問いかける金髪のロング少女ルーシィ

「あい！それがナツです」

陽気な青いしゃべる猫のハッピー

今、彼らたちはルーシイの買い物の帰りの電車の中だったとその時電車のドアがドン！という騒音とともに一人の銃を持った男が車内に入り込んできた。後ろにはもう二人ほど銃をもつた男がいる、さつきまで普通に乗っていた客もこの状態に驚いたのか一気にざわめきだした。するとバンッ！という鈍い音が車内に響き渡つた。一人の男が天井に向け発砲したのだ

男A 「この電車はわれわれがハイジャックした！」

男B 「お前たちには人質になつてもらうぞ！」

男C 「少しでも抵抗したりしたらすぐに撃ち殺す」

男D 「わかつたら大人しくしろ」

男たちそう言い放つと乗客たちは一斉に静まりかえった

「ちょっとナツ、なんとかしてよ！」

「うへへ・・・うえ・・・だめ・・・ちからが・・・でねえ

「もお～しつかりしてよ！」

「ルーシイ、オイラたちどうなつちゃうの？？」

「私だつて分かんないわよ！」

男B「おい！お前ら何騒いでんだ！ほんとに撃つぞー。」

「「ひいつ！」」

ルーシイたちがターゲットにされたそのときだつた

「おい」

後ろのほうから声がした、そこには赤髪の男が立つていた。その後ろには群青色をした二足歩行の猫もいた

男B「ああん？なんでお前殺されてーのか？」

と、男Bが銃を突き付けたが、赤髪の男は全く動じなかつた

「おめえらさつきからうつせえんだよ、せつかく寝てたのに田エ覚めちまつたじゃねエか、てめえただで済むと思つくなよー。」

と赤髪の男は男Bに怒鳴りかけた

「ちよつと！あんまり挑発しないでよ・・・」

とルーシイが震えた声で赤髪の男に言つた

男B「てめえ調子のつてんじやねえぞ！」

と再度銃を突き付けようとしたが、男Bの銃が宙に浮かんだ、他の男たちが持つっていた銃も宙に浮かんだ

男A「・・・え？」

男B「どうなつてんだ？」

男C「なんで勝手に？」

男D「・・・？」

と、男たちは不思議そうに宙に浮かぶ銃を見つめていた

「ちよつと！ちよつと！なにがおきてるわけ？」

「あい？」

「ううう・・・」

と、ルーシイたちもビックリしながら銃を見つめていた

するとその銃はきれいな放物線をえがいて赤髪の男の手に收まつた

「おめえら、覚悟できんだろうなあ」

と、赤髪の男が鬼のような形相で男たちを睨みつけた

「「「「ヒィイー！」」」

男たちは驚きながら逃げようとした、その時

「反発^{コンペル}」

赤髪の男がそうつぶやいたと思つと手に持つていた銃がものすごい勢いで彼の手を離れ男たちの背中に撲つてきり当たった

「――「ウツー」」

と、男たちは声をあげその場に倒れこんだ

「「すゞーーー」」

ルーシイとハッシュピーは声をそろえてビックリしていった

「雑魚がいきがつてんじやねえよ、ムナクソわりいやつらだば」

「キッズへやりすぎだよ」

「いいんだよこれくらこやつとかや、こべやトライカ」

「テラー！」

そうして、群青色の猫と赤髪の男は去つて行つた

「誰なんだろうね？ルーシイ」

「さあ、ただ、タダものじゃないことは確かね。」

「もしかして魔導師かな？」

「うん、多分そうだと思つ」

「あと、しゃべる猫もいたよ、びっくりしたね」

「あんたがいうのはどうかと・・・」

「つづつづふ・・・？」

その後、電車をハイジャックしようとした男たちは駅のホームの警備員たちにより取り押さえられた。

プロローグ（後書き）

ひとまずはこんな感じです話的にはウェンティ達が入りたてくらいの話です

プロファイル（前書き）

えりや、今日はキッチンのプロファイルです
それではどうぞ

プロフィール

主人公設定

名前：ユースタス・キッド

年齢：？

性別：男

紋章：左肩（黒）

身長：192cm

体重：85kg

好きな物：ケンカ

嫌いな物：気にくわぬいやつ

魔法：磁竜の滅竜魔導師

性格：荒々しくて極悪非道

声：浪川大輔

人物

とても荒々しくて喧嘩好きの極悪非道者。気に食わないやつは片っぱしから叩きのめすが。仲間には害を与えない。鼻がよくきき「殺戮の磁竜」という異名を持つ

見た目は、逆だつた赤髪にゴーグルを着用しコートの袖を片方だけ通して羽織っている、目の色は赤で目のふちと口、ツメを赤紫色でぬっている

磁竜の滅竜魔導師で体を自由自在にS極にしたりN極にしたり出来

る「磁石人間」である。親代わりだった竜の名前は“キラー”。磁石を食べることができる

技

磁の滅竜魔法

・磁竜の鉄腕

うでに鉄をくつつかせ大きな鉄の塊にする

・磁竜の散鉄

腕に付いた鉄を一気に離す

・磁竜の反発

触れずに鉄を跳ね返す

・磁竜の咆哮

強力な磁力がはつせいし、ありとあらゆる機会を狂わすことができる

滅竜奥義

・闇魔・狂銳磁雷

相手の足もとに地中に埋まっている鋭利な凶器をだす

・闇魔・磁獄豪手

腕に鉄がくつつき大きな手になる

昔闇ギルドに入っていたが、ギルドのやり口や雰囲気が気に食わなかつたので、ギルドを脱退したが、キッドの実績が良かつたことから、闇ギルドのマスターがそれを許さなかつたらしく未だにキッドとテララを探している。紋章は消されている

キッドの相棒

名前：テララ

年齢：6歳

身長：48・6cm

紋章：背中（黄）

見た目：ケロロ軍曹のテララを猫にした感じ

性格：天然

口癖：「テラ」 「テ～ラ～ラ～」

好きな物：魚

嫌いな物：ニンニク

魔法：翼^{エーラ}

声：大谷育江

人物

キッドが昔“キラー”に育てられていたころに見つけた卵をキッドが大事に育ててその中から出でてきた猫、とてもキッドになついていつもくつついている。完全に離れ離れになつてしまふときしきくなつて、たまに泣いてしまうこともある。

翼^{エーラ}がつかえて、キッドを運んだりしたり歩くのが疲れた時などによく使う

体の色が群青色で青いベレー帽のようなものをかぶっている、目の色はオレンジ色

天然でたまに爆弾発言をしたりする。また魚が好きでよくハッピーと取り合いになる、それに対しニンニクが嫌いで絵に描いたニンニクでさえも見たら気絶してしまつほど嫌い

プロファイル（後書き）

また変更があたらかえますので

ファーリーテイル！（前書き）

やつと本文に入ります

それではどうぞ

フェアリー・テイル！

「たつだいま————！」

「お帰り、ナツ、ルーシィ、ハッピー」

きれいな顔立ちをした銀髪の女性ミラジュー

「づがれだ！」

「あらどうしたの？ルーシィ」

ミラがルーシィに声をかけたがその時にはもづぐつたりしていたので、かわりにハッピーが答えた

「実はね電車の中で銃を持った男たちがいきなり入ってきてハイジヤックしたんだよ」

「あらあら、それは大変だつたわね、それでどうなつたの？」

「そしたら、赤い髪の毛の男の人がいきなり現れて男たち全員まとめて倒しちゃつたんだ」

「赤髪の男？」

「あい！」

「なんだハッピーそんなことがあつたのか？」

「あんたはいいわよね、ずっと酔つてたから」

と、ぐつたりした声のルーシィがつっこんだ

「しゃーねーだろが、乗り物にがえなんだから」

「まあまあ

その場を落ち着かせるミラ

「ナツさん達おかえりなさい」

青い髪の毛の少女ウエンディ

「まったくこりないわね、あんたち

しゃべる白い猫シャルル

「ウエンディ、シャルル、ただいま」

ルーシィはウエンディとシャルルに挨拶をした

「それにもしても、その男何者なの？」

と、やつきの話を聞いていたらしくシャルルはルーシイに問いかけた
「さあ、わかんないけど、タダ者じゃないみたいなのは確かだと思
う」

「うおおおお、戦つてみてええ！……！」

と、火をふきながら騒ぎ出すナツ

「ナ、ナツさん落ち着いてください」

ウェンディがナツを止めるにかかった

その時だった、ギルドハウスのドアがバン！という音とともに勢い
よく開けられた、そこにはやつき電車にいた赤髪の男と群青色の猫
が立っていた

「アイツ！」

ルーシイが驚いたような声をあげた

「どうしたの？ ルーシイ」

ミラがルーシイに問い合わせた

「アイツだよ、//ラさん電車にいた赤髪の男ー。」

ルーシイがミラに説明した

「つむせえ、ギルドだなあ、なあテラフ」

「そういうことは言わないほうがいいよ、キッド」

「んだよつれねえなあ」

と赤髪の男と群青色の猫が話していた

「おい、そこ銀髪のねえちゃん//のマスターはどうだ？」

男がミラに問い合わせた

「マスターならそこに座ってるわ、あと私は//ラジューンよ

「そうかい、あんがとよ//ラ」

「ええ」

そして男がマスターの前に立った

「ん？ おぬし何者じや？」

フェアリー・テイルのマスター・マカロフ

「俺は、キッドだユースタス・キッド、俺をこのギルドに入れてくれねーか?」

「なんじゃそんながとか、ここに来たのは何のこゝか」

マカロフはそういうのを呼んだ

「紋章はどこに付けてほしい?」

大きなハンコをもつて「ゴッ」と笑うミラ

「んじゃあ、左肩に頼む」

と、いつて「一」の袖を通していない右肩を出した、ポン！と黒色のハンゴがキッドの左肩に押されフェアリー・テイルの紋章が刻まれた
「やつたわね、これであなたもフェアリー・映ルの一員よ」
そうしてまた二ヶツとほほ笑むミラ

その後テララも背中に黄色の紋章を刻んでもらいはれてフェアリー・テイルの一員となつた

かねとナジがキッドにのぼつこ近くこじきていいこひた

「お前が、電車の中で暴れた赤髪男か？」

「おれあ、キッドだユースタス・キッド、電車？・・・ああハイジ
ヤツクのやつか、暴れちゃいねえよただ気に食わなかつたから喧嘩
しただけだ」

「へえ、俺はナツだナツ・ドラグール、ところで俺と勝負しねえか？」

ナツはキツドを挑発した

「ちよ、ちよいどナシやめなさいよ」

「上等だわやうやうやられてーんなり昌也のぬしへやるね」

挑発に乗るキッド

「おまえがおまえのやうに、おまえのやうに生きる」

二人とも完全に喧嘩モードだ

「燃えてきたぞお」

「ムナクソワリイ野郎だぜ」

「もお」「はあ

大きくため息をつくルーシィ

フェアリー・テイル！（後書き）

駄文はじょじょに直していきたいと思います

ナシバニキシテ（繪畫也）

ナシバニキシテの技が出て来たも

アレでござりハ

ナツ×キッド

ナツとキッドは喧嘩をすることになり、フェアリー・テイルの外に出た
「ナツが喧嘩するだつて？」

上半身裸の男性グレイ

「なんだあの赤髪の男は？」

鎧を身にまとつた女性エルザ

「へ、何でもいいがサラマンダーあとで俺にもそいつと戦わせろ」

黒髪のロングヘアーの男性ガジル

「俺は何人でも相手してやんよ」

余裕をかますキッド

「がんばれーナツー」

応援を始めるハッピー

「それにしてもあんたの相棒も物好きねえ」

呆れた声でテララに話しかけるシャルル

「テラ～、キッドは喧嘩好きなんだよ」

と、こたえるテララ

「そういえば君の名前聞いてなかつたね」

今度はハッピーが問い合わせた

「僕テララっていうんだよ、君達は？」

「おいらハッピー、ナツの相棒だよ、これからよろしくねテララ」

「私はシャルルよ、あそこにあるウーンディって女の子の相棒よこ

れからよろしくね、テララ」

「テラ～こちらこそ、ハッピー、シャルル」

ハッピーたちが交流を深めている中ナツたちは喧嘩を始めようとしていた

「かかるてここよ、つづ田ヤロー！」

「おめでもつり田だろうが

と、ようちい口げんかをしていた、周囲には、ナツたちの喧嘩を見に来たギルドの仲間たちで、いっぱいだ

「いくぞ！火竜の鉄拳」

そう叫んだとともにキッドに炎に包まれた拳で殴りかかってきた瞬間、キッドの片腕にはそこら中の鉄がくつきだした、そしてキッドの腕が鉄の塊に変わったと同時に

「散鉄」

キッドがそう言つた瞬間、腕にくつついていた鉄が一気に腕から離れものすごいスピードでナツの方向へ飛んで行つた、その鉄の塊はよけきることができなかつたナツの顔にモロに直撃し、ナツはふつとばされてしまった

「グハッ！」

何とも痛々しい光景とともにナツの苦痛の声が聞こえた

「なんだ今の技は？」

エルザがキッドの技に食いついた

「グッ！ 奇妙な技使いやがつて！」

ナツがさけんだ

「おいおい、そんなもんかよ」

今度はキッドがナツを挑発し始めた

「ふざけんな！火竜の剣角」

全身に炎を身にまとつたナツがキッドに向かつて体当たりを決めようとした、すかさずキッドは自分の腕を横にあげたと思ったらキッドの姿がその場から消えた、ナツはそのまま壁にぶち当たつてしまつた

「何！？」

驚きを隠せずエルザは声をあげた

「いつつつつつ、どこ行きやがつた」

ナツが頭をさすりながら周りを見回した、すると大きな鉄の壁に手をついてナツを見ているキッドの姿がそこにあつた

「そんなんもんかよ」

と鼻で笑つて見せるキッド

「くわー、腹立つー、ビーなつてんだアイツの魔法はー。」

ナツは完全にイライラモードに入つていた

「こねーんだつたらこいつちから行くぞ、鉄腕」

そういうつたキッドの両腕に多くの鉄がくつつき、両腕が鉄の塊になつた

「なんだありやー。」

思わず声をあげてしまつナツ

そうしてキッドは思こつたり鉄の両腕を振りかぶつた

「おらよー。」

掛け声とともにナツに向かつてその両腕を振り落とした

「グハアツ！」

ナツは鉄の塊の下敷きになつてしまつた

「・・・」

しばらく沈黙が続き

「そこまでーー！」

マカロフが手を挙げて試合終了の合図を送つた

「ふうー」

キッドが息を大きくはくと、鉄の山をかき分けてナツを引きずり出した、ナツは目をまわして氣絶していた

「おーい、大丈夫か？」

キッドはナツを揺さぶつた

「・・・」

「たぐ、もう終わりかよ」

そう言つて、ナツをマカロフに突き出した

「ここの、のびてるぜ」

グレイはナツの顔を覗き込んだ

「ぬうー、おぬし何者じや？」

マカロフがキッドに問いかけた

「おれはただの喧嘩好きな滅竜魔導士だ」

キッドは問いに答えた

「……」

みんなが驚きの顔でキッドを見た

「んだよ気持ちわりいなあ」

そうつぶやくキッド

「お、お前ホントに滅竜魔導士なのか？」

震えた声でグレイがキッドに問いかけた

「なんで嘘つかなきやなんねーんだよ」

何食わぬ顔でキッドは答えた

すると、周りでナツ達の喧嘩を見ていたフェアリー・テイルのメンバ

ーが一斉に騒ぎ出した

「まじかよ！ ウェンディに続き、また一人滅竜魔導士が増えたぞー

「つかのギルド最強なんじゃね？」

「これで4人目だー」

「今日は宴だー」

なんて声があちらこちらから聞こえてきた

「なんなんだよこのギルドは」

キッドは呆れた声でいった

「おい、ゴーグル！ てめー今度は俺と戦えよー」

ガジルが威勢のいい声で宣戦布告をしてきた

「上等だ、てめえ何て名前だ？」

ガジルに問いかけるキッド

「俺はガジルだ、んなことはどーでもいんだよ、かいつやんぞ」「上等だくそやろうがあ

今度はガジルが喧嘩モードに入った

「ギヒッ！ 潰してやんよ」

「てめえもムナクソワリイ野郎だなあ、今あ消してやるよお

ナッシュキッド（後書き）

こんどはガジル・Sキッドです

ガジル∨Sキッド（前書き）

今日はガジル∨Sキッドです

それではどうぞ

ガジルVSキッド

ナツとの闘いに引き続き今度はガジルとキッドが戦うことになった
「また、滅竜魔導士^{ミラゴンスレイヤー}VS滅竜魔導士かよ、うらのギルドってホント
に多いよな」

少し呆れ気味の声でつぶやくグレイ

「そんなことよりグレイ、服

ルーシイ^{ルイ}がグレイにいった

「ん？ ぬおつ…いつのまに」

上半身裸のことに恥ずいたグレイはあわてて服を着た

「お前もつさから鉄を体に付けたり離したり磁石見てえな魔法だな」
ガジルがキッドに話しかける

「おれあ 磁竜の滅竜魔導士^{ミラゴンスレイヤー}だ、いわゆる『磁石人間』だ、お前も滅
竜魔導士^{ミラゴンスレイヤー}なのか？」

問いかねるとともに質問するキッド

「はつ！ いかれてる魔法だぜ、おれは鉄竜の滅竜魔導士^{ミラゴンスレイヤー}体を鉄に変
えることができんだよ、んなこたあどーでもいんだよ、さつさとか
かつてここよ」

「てめえが聞いてきたんだろうが、くそ野郎が」

また幼稚な口げんかが始まった

「んじやあいくぞ、おらあ…」

掛け声とともに腕を鉄に変えまつすぐ[】]にキッドのほうに伸びてきた、
すかさずキッドが手前にを挙げたすると、まつすぐのびていたはず
の腕がキッドの数十センチ手前でとまっている

「ぐつ…うごかねえ」

自分の腕が止まってしまったことに驚いたガジル

「おれあ、体が変幻自在にS極とN極を変えることができんだよ、
だからおめえの魔法は俺の前では無力だ」

キッドはニヤツと笑つた

「ふざけんじやねえ、鉄竜剣！」

ガジルのあいてる片方の腕が鉄の剣に変わり、キッドの頭めがけて振り落とされたが、キッドは全く動じずに突つ立つていた、するとまた鉄の剣がキッドの頭から数十センチ手前で止まつた

「ツ！－くそがあ！」

ガジルが荒々しい声で叫び再度力を入れた

「何べんやつてもむだなんだよ」

そう言つてあいているほうの腕を前に出し、キッドの腕にそこいらへんの銃や剣などといった鉄類が彼の手にくつついていった

「散鉄」

と、いつた瞬間ナツの時と同じようにキッドの腕に付いていた鉄の塊がものすごいスピードでガジルめがけて飛んでいった、ガジルはそれによけようとしたが

「なに！？」

今度はキッドの手に、自分が鉄に変えた腕がぴたりくつついていた、すかさず戻そうとしたが間に合わず、ガジルもモロにくらつてしまい、それとともに、キッドの手のひらにくつついていたはずの手が離れ、そのまま吹っ飛んで行つてしまつた、

「厄介な魔法だな」

ガジルはそう呴いた、その時キッドはもう次の攻撃態勢に入つていて、両腕に鉄をくつつけて鉄の塊になつていて。

「今度はこっちから行くぞ」

といつて、両腕を大きく振りかぶりガジルの頭めがけて腕を思いつきり下ろした、それをガジルは自分の両腕をクロスさせ何とか受け止めた

「ぐぐぐつ」

「うおおお！」

二人の競り合いが始まつた、どちらも力と力がぶつかり合いで少し火花が散つている

「吹きとべえ！」

キッドがそう叫んだ瞬間、手にくつついえいたはずの鉄が一気に腕から離れていきガジルも吹っ飛んで行ってしまった

「くそ、なめやがって」

完全にキッドに押されているガジルは少し腹が立っていた

「あいつ、次、俺とやるときは絶対ぶっ飛ばしてやる！」
さつきまで伸びていたナツが今度は生き生きとしてガジルとキッドの戦いを見ていた

「あんた、こりないはねえ」

ルーシイがため息交じりに呆れた声でナツにいった

「それにしてもあのキッドって人、どういう魔法なんでしょうかね？」

ウェンディが不思議そうにしている

「鉄をくつつけたり離したりとまるで磁石のようだな」と、推理を始めるエルザ

「おらあかかつてこいよ！」

挑発するキッド

「つるせえ、鉄竜の咆哮！」

ガジルは口から鉄の破片を発した

「こりやあでけえなあ」

キッドはのんきにいいながら両腕を前に出したそつしてまた

「反発」

キッドはそう叫び、鉄竜の咆哮を抑えている

「かかつたな」

ガジルが咆哮の横から顔を出し、咆哮を止めるのにいっぱいぱいだったキッドの横腹めがけて鉄竜棍を繰りだした

「ぐうつ！」

さすがこれはとめることができずに声をあげながら吹っ飛んでいく

キッド

「ざまあみやがれ」

ガジルはすまし顔でキッドにいった

「ムナクソワリイ野郎おだぜえ、みせてやるよ、閻魔・磁獄豪手！」
キレ氣味の声でキッドは叫び腕をうえにあげた、するとみると鉄
がキッドの腕にくつついでいき大きな腕が出来上がつていた。

「させるか！鉄竜の咆哮！」

ガジルがまた咆哮をしたが、その口から出た鉄の破片はキッドの腕
にくつついた

「なに！」

ガジルは思わず驚きの声をあげた

「ほらよ！」

キッドが大きく振りかぶり大きな鉄の腕がガジルめがけて振り落と
された、その面積のでかさにガジルは惜しくもよけることができず、
鉄の塊の下敷きになつてしまつた

「そこまで！」

マカロフが再度腕をあげ勝負のジャッチをした、口キ口キと首を鳴
らしながらキッドはナツと同様ガジルを鉄の山から引きずり出した、
かすかに意識があつたが、動けないのは確かだつた

「こんなもんか」

キッドは鼻で笑いガジルをマカロフの前に寝かせた
「おぬし、とんでもないほどのちからじやのお」

マカロフはほめるようにキッドにいった

「そりやあんがとよじいさん」

キッドは、軽くお礼を言った

「おめえすげえなあ、うちの滅竜魔導士を一人も倒すなんて、いつ
たい何もんだ？」

グレイがキッドに問いかけた

「だからさつきからいってんだろうが、ただの喧嘩好きの滅竜魔導
ヤ ドラゴンスレイヤー

士だつつの「

少しキレ気味に答えた

「お前、名前は何と言つんだ?」

今度はエルザが問い合わせウーンティが寄つてきた

「おれあ キッドだ、コースタス・キッド、おめえらは?」

聞き返すキッド

「私はエルザだ、エルザ・スカーレット、以後よろしく頼むぞキッド」

「私はウーンディ、ウーンディ・マーベルですよろしくお願ひしますキッドさん」

と一人ともほほ笑むように答えた

「ああ」

あいそなく答えるキッド

「俺はグレイだ、グレイ・フルバスターそれにしてもお前、どんな魔法使うんだ?」

グレイが自己紹介を兼ねてキッドに質問した

「おれは体を変幻自在にS極とN極に変えることができる『磁石人間』だ」

キッドはそう答えた

「じゃあお前磁石食えんのか?」

と、割り込んでナツが質問した

「ああ」

キッドはそう答えた

「そんでもってこいつが俺の相棒のテララだ」といつて近くにいたテララを抱きかかえていった

「テラー」

テララは元気良く返事をした

「お前も猫もつてんのか? おれももつてるぜ、ハッピー」

ハッピーに声をかけるナツ

「あいやーーー」

「こちらも元気良く返事をするハッピー
「わたしもいますよ、ねシャルル」
といつてシャルルに声をかけた
「ま、そういうことだからよろしく
あいそつのない挨拶を交わすシャルル

そうしてキッドは、はれてフェアリーテイルにはいることになった

ガジル VS キッド（後書き）

まだまだつづきまーす

フェアリー名物（前書き）

今回はフェアリーテイル名物の宴です

それではどうぞ

フュアリー名物

キッドとトカラがフュアリーテイルに入ることによつ、今は宴の中だつた

「わたし、ルーシィ、ルーシィ・ハートフィリア、よひじくねキッド」

ルーシィはキッドに自分の自己紹介をした

「ああ・・・お前、どつかでおれとあつたことねえか?」

了解とともに不思議そうにルーシィに聞いかける

「ほら、ハイジャックの時の」

ルーシィが答えた

「ああ! あん時のうるせえ金髪女か」

と、思い出したキッド

「誰がうるせいや金髪女よ!」

否定を求めるルーシィ

「うるせえじゃねーかよ」

冷静に答えるキッド

「にしても、キッドさんなんでフュアリーテイルに入りつと思つた
んですか?」

不思議そうにウェンディが聞いた

「・・・んなもん理由がなくちやいけねえのかよ」

キッドは少しウェンディを睨む感じで答えた

「い、いえただ気になつたから・・・」

少し弱気になりおろおろするウェンディ

「キッド、そんなに怖い顔しちゃダメだよ」

テララがキッドを落ち着かせた

「・・・」

キッドは少し浮かない顔でだまりこんだ

「・・・？」

それに気づいたウーホンディはキッドを不思議そうに見つめていた

「おーーーおまえ、滅竜魔導士アラゴンスレイヤーってことはアラゴンに教えてもらつたつてことだよな」

ナツが元気いっぽいにキッドに問いかけた

「ああ、まあな」

キッドは愛想のない声で答えた

「おまえ、“イグニール”って竜しらねーか？」

ナツが期待を膨らませた声で言った

「“イグニール”？誰だそりゃあ？俺が知つてんのは“キラー”つて竜しか知らねえよ、今はどこにいるかはしらねえがな」

キッドはそう答えた

「もしかしてそれって7年前の777年の7月7日のことか！？」

ナツが食い入るように聞いた

「よく知つてんじゃねえか、深くは覚えてねえが確かそうだつたな」

キッドが真剣に答えた

「なんでこんなにフが続いてんだよ！…」

ナツが理不尽に切れた

「しらねえよ！んなもん！…」

キッドがそう答えた

「もお、やめなよナツ～」

「テラ～、キッドも落ち着け！」

一匹の猫が一人を止めた

その後、夜までどんちゃん騒ぎは続き、やつさまで動けなかつたガジルの意識がしつかり戻つたと思うと、今度はナツと喧嘩を始めた、その喧嘩が喧嘩を呼び、またその喧嘩が喧嘩を呼びといったように、最終的にはフェアリー・テイルのだいたいが喧嘩をし始めた、

「こつもこんななのか？」

キッドは呆れた声でルーシイに言った

「まあ、だいたいはね・・・」

ルーシイがそう答えた瞬間、喧嘩をしていた方向から椅子が飛んできて「ンッ」という鈍い音とともにキッドの頭に直撃した

「ちょ、ちょっと大丈夫？」

ルーシイが心配そうに、大きなタンゴブをつくったキッドに言った

「上等だコラア！片づかから呪きのめしてやるよお！」

完全に切れたキッドは両腕に鉄の塊をつくり、喧嘩のじたじたの中に飛び込んで行った

「はあ、結局こうなるのよねえ」

ルーシイが大きなため息をついてそういった

「あい！それがフェアリーテイルです」

「テラ～！」

フェアリー名物（後書き）

終わり方があれですが、誤字、脱字はできるだけ直します

■ 1 (前書き)

「いや、今日はキッドが昔入っていたギルドの話になります
それでねどいわ

「……でもちがいないんだな……」

不気味に微笑む男

「ハイここで間違いありません」

それにこたえる部下らしき男

「確実にやつを捕まるぞこいなあ？」

「わかりました」

闇に消えゆく男たちの声

「……」

「どうしたんですか？ キッドさん」

ウーンティが真剣な顔で黙りこんでいるキッドに話しかけた

「あ？ ……ああ……」

氣の抜けた返事を返すキッド

「キッドさん？」

心配そうにウーンティがキッドの名前呼んだ

（こやな予感があるがあ……おわかい間で隠さつけてきたのか・

・・んなわけねえか）

「……シード！ おこキッド」

深く考え込んでいたキッドにナツが話しかけた

「……ああん？ なんだよ」

キッドがキレ氣味に言った

「なんだよじやねえだろ？、わざきから声掛けたのにボーッとして

やがつて」

ナツもキレ氣味に言つ

「おめえこは関係ねえだろ？が」

負けじと言つ返すキッド

「んだと『リラ』」

「ああん、てめえ叩き潰すぞ」

「やつてみるよこのくそゴーグル」

「誰がくそ『リーグル』だ、へなちょこ炎」

「そんな幼稚な口げんかをしていると

「お前たち！いい加減にしないか」

と、何とも言えないオーラを出しながら一人を止めるエルザ

「あ、あいせー」

震えた声で返事するナツ

「ケツ！」

全く反省の色を見せないキッド

「ナツもナツだが、キッド、どうしたんだ？」

エルザがキッドに聞いた

「ああ？ 何がだよ？」

全く理解していないキッド

「さつきからボーッとしているが、お前らしくないぞ」

そう問い合わせるエルザ

「・・・かんけえねえよ」

少し間を開けて答えるキッド

「関係ないことはない、私たちはお前の仲間だ」

優しい言葉をかけるエルザ

「・・・・・えんだよ」

小さな声で呟くキッド

「ん？ なんだ？」

エルザは聞き返した

「うぜえんだよーー！」

ものすごい剣幕で怒るキッドはそのままギルドを出て行ってしまった、ギルドの中が冷たい空気に包まれた

「ちよ、ちよっとまつてよキッド」

テララはキッドの後を追った

「なんだあいつ、らしくねえなあ」

のんきにこうナツ

「でも、なにかかくじー」としてこぬよつたな感じでしたよ」

そう答えるウホントイ

「かくじー」と?」

ルーシイがウホントイに聞いた

「はい、なんかずつと黙りこんで、一人で何か抱えてこるよつた感じでした」

そう答えるウホントイ

「かくじー」とねえ

少し考えるルーシイ

「・・・少し踏み込みすぎたか」

反省するエルザ

「エルザが悪いんじゃねえよ」

慰めるグレイ

「ああ、ありがとうグレイ」

と、お礼を言うエルザ

(ああ、グレイ様、ジユビアも慰めてもらいたい)

心の中でやう思つジユビア

その時だつた、ドンーという音とともに扉が開き、そこには一人の男を先頭に後ろには何百人もの武装した男たちがいた・・・

「ねえキッドちょっと言ひ過ぎじゃない?」

飛び出していくキッドの後を追いかけ、テラララせやつぱつた

「・・・」

全く返事がないキッド

「あのことを考えてたんでしょう、ですが、あこづらむじいろでは付いてこないって」

テララはキッドに向ひて言った

「・・・」

少し反応したが、全く返事がないキッド

「・・・あのことはキッドが悪いんじゃないんだしさあ、もうもどりつよ、新しいギルドにさあ」

テララは返事がなくとも話し続けた

「・・・俺のせいでも迷惑かけちまうのはばいめんなんだよ」

今まで返事がなかつたキッドが初めて口を開いた

「それは・・・」

テララは返す言葉がなかつた

「何べん潰しても、しつけえぐらこおつてきやがる、俺が行くとこ行くとこに必ず現れやがる」

強めな口調で言つキッド

「・・・」

今度はテララが黙り込んでしまつた

「・・・それに、俺を探すためなら何でもするやつらだ、ギルドにめえわくかけるかもしんねえだろうが」
キッドはそう言つた

「じゃあなんでキッドはフュアリー・テイルに入ったの?..」

核心を突くテララ

「・・・」

返す言葉がないキッド

「そんなことまで考えてたんだつたら、なんでキッドはフュアリー・テイルに入つたんだよ!..」

少し強い口調で言つテララ

「・・・」

また黙り込むキッド

「どうでもいいギルドだったから?違つだろー初めて信じる」
「できたギルドだったからだろー!」

テララは徐々に声が震えていった

「・・・」

キッドは黙つていながらも少し反応していた

「初めて納得できて、初めていい思いができる、初めて信じること
ができる、初めて本当の喧嘩ができたからだろー!」

完全に声が震え涙目になつてゐるテララ

「・・・」

「だから・・・だから・・・グスツ」

「・・・」

「帰るひよー僕らのギルドにさあーー。」

泣きながら言い切るテララ

「・・・たく」

やつと口を開いたキッド

「男がピーピー泣いてんじゃねえよ、さつさと帰るわ
そういうながら、テララの頭を乱暴に撫でるキッド

「うん!」

涙をこすりながら満点の笑みでこたえるテララ

「少しば、ましなこと言えるようになつたじゃねえか

キッドはポソリとつぶやいた

「え?なに?」

テララは鼻をすすりながらキッドに囁つた

「何でもねえよ」

そんな会話をしながらキッドたちは自分たちのギルドに帰つていった

闇ギルド 1（後書き）

まだつづきをまーす

闇ギルド2（前書き）

今回は、闇ギルド1の続きです

それではどうぞ

闇ギルド2

時はさかのぼりフェアリー＝テイル

「ここ」のマスターは誰だ」

先頭に立っている男がそう言い放つた

「マスターは今、出かけているの、要件だつたら私が聞くわ」

ミラが男に向かつてそう言つた

「そうか・・・ここにキッドという男はいないか？隠すとひどいぞ
お」

男はミラを脅した

「ミラ、下がつている、私が相手する」

今度はエルザが出てきた

「貴様らは何者だ、闇ギルドか？」

エルザは男に向かつて言つた

「質問しているのは俺だ、さつさと答へる」

男は少しキレ気味に言つた

「確かにキッドはここ」のギルドだが、それがどうした」

エルザは質問に答えた

「今どこにいる？」

男がまた質問した

「どこ」のやからかも分からん奴らになぜそんなことを教えないくては
ならない？」

エルザは対抗した

「ほお、逆らうといふのか？」

「だつたらなんだ？」

両者のにらみ合いが続いた

「ふつ、ならばよからう、後悔させてやるるー殺れお前たちー！」

男がそう言つた瞬間武装した数百人もの男たちがギルドに攻め込ん
できた

「皆のもの引き締めてかかるぞ！…」「

エルザも負けじとギルドの指揮をとった

「うおおおお、燃えてきたぞお」

ナツがそういうながら斤っぱしから男たちを潰しにかかった、さすがの闇ギルドとはいっても、名知れているギルドの一つであるフニアリー・テイルには歯が立たなかつたらしく、数がどんどん減っていく、だがその数にはきりがなく、倒しても倒しても次のやつがどんどん出てくる

「ほお、やるじゃねえかあ」

男はその光景を見ながらも落ち着いていた

「そんなことをいつてられるのも今のうちだ、換装…」

そういうてエルザは天輪の鎧に変化した

「へえー俺とやろうつてか、上等だ、お前名前は？」

男の右手に黒刀が出てきた

「エルザだ、貴様は？そしてお前たちの目的はなんだ？」

エルザが男に聞き返した

「俺は、リューマだ、俺たちひまスターの命令にただしたがつているだけだ」

リューマはそう答えた

「キッドを捕まえてどうする気なんだ？」

エルザは質問を続けた

「んなもん俺が知ったこつけやねえよ」

そう言つてリューマは黒刀をさやから出しエルザに突きをきました、それに反応したエルザは両手に持つている剣をクロスセセ、なんとかガードした

「ほお、なかなかやるじゃねえかあ」

「ふざけるな！」

エルザは自分の後ろに複数の剣を出現させた

「行け！剣たちよ」

そう言つた瞬間エルザが出した剣達がリューマにめがけて一気に向かっていった、が、リューマはそれをすべてあっさりとよけてしまつた

「おせえなあ

リューマは余裕だった

「バカな、あれほどの数の剣をよけただと！」

エルザは驚いた

「くつはつはつは、剣は数じやねえよ、早さだ」

そう笑いながらリューマは刀を横に振つた、するとエルザの横腹が急に切れ、血が飛び出した

「グツ？！」

エルザが声をあげ膝をついた

（まったくみえなかつた・・・しかも鎧を貫いただと！？）

「くつはつはつは、どうだ？悔しいか？」

エルザをあおるリューマ

「つるさいー！」

そういうつて、エルザは、リューマの365。一剣を出現させた。逃

げる隙間など少しもない

「ほお、こりゃげえなあ

危機にもかかわらず余裕をかますリューマ

「ふざけるな！」

エルザはそう言つた瞬間リューマ中心に剣を突き刺した、はずだった
「だからおせえんだつつの

「！」

さつきまで複数の剣の中心にいたはずのリューマがエルザのすぐ後ろにいた

「あばよ、妖精女王^{ティターニア}」

そつこつて刀を振り下ろそうとしたその時だった
横から鉄の塊が飛んできてリューマは吹っ飛んでいった

「つひのもんに手てえ出しへんじやねえよ」

わいわい、出ていったキッドがそこに立っていた

「キッド、お前！戻って来てたのか」

エルザはキッドにさう言った

「勘違いすんな、テラララが帰りてえつて聞かねえから帰ってきたんだよ」

キッドは、照れ隠ししながらさう言った

「もお、キッドホントのことことぬつよ」

「ホントのことだらおがー！」

テララのボケに突っ込むキッド

「お前たち！今は戦いに集中せんか！」

エルザがついにキレた

「テ、テラ～」

「ハッ」

キッドとテララがそろそろ答えた

「おつキッド、久しぶりじゃねえか」

そつ言つてせつとき飛ばされたはずのリューマはペンペンしながらキッドに話しかけた

「・・・・・誰だてめえ？」

その場が一瞬こうついた

「テ、テメーお約束守つてんじやねえよ」

リューマがそう突っ込んだ

「いや、マジでおめえだれだ？」

「もおいーーー！」

完全にキッドの頭からなかつたリューマ

「なんとなく、だけどキッドが若干押している・・・」

テフラがそう呟いた

「んなことより、俺のギルドをこりんなんにしゃがつて、てめえらタダで済むと思うなよ」「

キッドは完全に今の現状にキレていた

「はー！それが自分のせいだつたらせわねえなあ

リューマがそういった

「ーーーーてめえらマジで動きだしたのか

キッドは少し落ち着き、リューマに聞いた

「おーおーキッド、まさかマスターの性格を忘れたなんて言わせやしねえぜ、なんたつて何年もお前のことを追い続けたんだからなあ

リューマはそう言つていながら剣先をキッドに向けた

「・・・ムナクソワリイ野郎だぜえ、てめえらあ、こいこい出しだしたこと後悔させてやるよ」

そういうつてキッドの両腕に鉄がくつつきだし、みるみる大きな鉄の塊になった

「・・・キッド」

エルザはそう呟いた

「磁竜の散鉄！」

キッドがそう言った瞬間片腕の鉄の塊がリューマに向かつて飛んで行った

「おそいー。」

そう言つてリューマはそれを軽々とよけた、そりこんで肉眼ではどう

えられない速さで、キッドに突きを炸裂したが、

「・・・そういうやあおめえには刀が聞かなかつたのか」

リューマの刀はキッドの数センチ手前で小刻みに震えながら止まつていた

「ほお、初めて会つたのには詳しいじやねえか、おらよ！！」

そういうつてキッドはもう片方の鉄がくつついているほうの腕をリューマに振り落とした、だが、ぎりぎりリューマはそれを後ろによけた

「ちょこまかとお」

そういうつて、キッドはリューマの刀をひきつけた

「え！？ ちょつ、待て！」

刀をがつちりつかんでいるリューマはそのまま刀と一緒にものすいスピードでキッドのもとにひきつけられ

「フンッ！－」

キッドは刀と一緒に飛んでくるリューマをタイミング良く踏みつけた

「フガア！」

リューマはそのまま地面にたたきつけられた

「ハツ！じつとしやがれ」

そうリューマに怒鳴りつけたキッド

「て、てめえ、きたねえまねしてんじやねえよ」

そういうつて、ふらふらとたちあがるリューマ

「そこまでじや！－」

「どこからか声が聞こえた、その声の主は

「じつちゃん！－どに行つてたんだよ

マカロフだった

「ウム、ちょっと評議員によつがあつてのむ

ナツの質問に答えるマカロフ

「それにも貴様らは・・・闇ギルドじやな

マカロフはよれよれのココーマに向かってそう言った

「ああん？じじいだつたらなんだつてんだよー。」

ガラが悪そうにリコーマはマカロフに逆らつた、するとマカロフは「貴様らのマスターによーく伝えておけ！今度わしの家族ヤハタクに手を出したら、タダじゃすまぬとなー！」

いつものマカロフではなく、全く違うオーラを出しながらリコーマを睨みつけるマカロフ、その姿には、その場にいた全員がゾクッとした

「クツ！・・・おい！野郎ども帰るぞー！」

リコーマがそういうて、男たちは、倒れた仲間をおぶりながらフニアリーテイルを後にした

闇ギルド2（後書き）

おひなまつとひづれまーす

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2883ba/>

磁竜の滅竜魔導士

2012年1月14日17時56分発行